

もとのりなが
本居宣長、

雨の伊勢本街道を歩く

翌朝の三月十三日、宣長らの一行は、まだ夜が明けられないのに萩原を発ちました。雨がしとしと降っていますが、「伊勢本街道」を歩きはじめました。天気も悪く、これからの道の状況が心配で、とても心細く、宣長の気持ちは晴れません。途中では、「この道から室生はずいぶん近いと聞いているが、雨がひどく降っていて道も大変悪いのでお参りはできない。」と室生寺へのお参りを氣にかけています。その後、榛原と室生との境である石割峠を越え、田口、黒岩、山粕、桃俣、菅野をひたすら歩きました。

この日は、多気まで行く予定でしたが、雨がひどく降り、風も激しいので、その手前の石名原（いしなはら／三重県津市美杉町）での宿泊となりました。道中の桜は花盛りでしたが、あいにくの悪天候、宣長の気分は優れず、何も心に残らなかったで、歌などもまったく詠むことができませんでした。

翌十四日は、雨が止みましたが、まだ気分が優れないので、宣長は駕籠に乗って銅坂（かいさか）越えです。険しい山道のため、徒歩の人々は、ちよつと登っては休憩の繰り返しでし

す。この坂を下ると間もなく多気の里です。多気は、宣長の祖先が代々仕えた伊勢国司・北畠氏の本拠地です。ここから伊勢本街道は、櫃坂（ひつさか）越えとなりますが、松坂へ戻るには遠回りとなるので、手前の堀坂峠を越え、松坂の自宅へ無事、戻りました。宣長四十三歳、明和九年（一七七二）三月五日から十日間の「大和への旅」が終わりました。

この旅の様子は、宣長が『菅笠日記（すががさにつき）』という書物（寛政七年／一七九五年刊行）に記しています。この日記は、その後、吉野や飛鳥を巡る人々のガイドブックとしても読まれました。

宣長の代表的な書物、『古事記伝』の執筆は、明和元年（一七六四）から寛政十年（一七九八）に行われています。明和九年の「大和への旅」は、宣長の「古事記」の調査研究に大いに役立ったことでしょう。



特別史跡 本居宣長宅跡（松阪市）

文・柳澤一宏（文化財課）

人権コーナー

真ちゃん・和ちゃんのい

身体の筋力が衰える「脊髄性筋萎縮症（SMA）」を生まれつき患い、電動車いすに乗りながら音楽活動が続けてきた、夫婦漫才デュオ「真ちゃん・和ちゃん」の和ちゃんこと、阪口和世さんは、今年の4月、宇陀市開催の「4・11人権を確かめよう日市民の集い」でのご講演の前に、肺炎にかかり、20日間の入院の後、懸命の治療や看護の甲斐なく、永眠なさいました。

SMAは、脊髄の運動神経が変異して、筋力低下や呼吸不全等を引き起こす難病です。

幼少期から20代まで闘病の為、病院で毎日を過ごし、身近な友人の死や死の恐怖と向きあいながらも、大好きな音楽を励みに生きてきた和世さんは、当初、「亡くなった友達の分まで、生きていかねば」と考えていましたが、そのうち「一人ひとりとはかけがえない存在で、友の代わりを生きていくことはできない。彼らの存在は過去のものではなく、今も私の中に生き続けていることから、自分にできるのは、ともに生きた日々を歌で伝えることだ」とも考えるようになりまし

た。

24歳の時、病棟でのコンサートに訪れた大学生の真治さんと出会い、その後、結婚。真治さんが、身の回りの世話など、和世さんを支える生活を送る中、ある時、2人の行きつけのカフェの店主に「まな板の上の鯉になつたつもりで」と、2人で歌うことを勧められ、ライブ活動を始め、地元の喫茶店や学校、老人会などでも歌うようになりました。彼らの活動は、ユーチューブなどでも見るができます。病気の和世さんのありのままを受け入れ、献身的に尽くした夫の真治さんの姿と、最期まで病氣と戦い、生き抜いた和世さんの生き様は、これからも病氣と闘う人の励みになり、また、多くの人々に勇気と希望を与えていくことでしょう。

